

社団法人 京都府助産師会

事業報告書

平成24年度

平成24年4月1日から平成25年3月31日まで

目 次

《平成24年度事業報告書》

はじめに

I 女性・子育て健康支援事業（公益目的事業1）	2
1 相談事業	
1) 事業① 無料電話・メール相談	
2) 事業② 来館個別面接相談	
3) 事業③ 無料体重・身長測定（乳幼児）	
4) 事業④ 不妊・不育等相談	
2 妊娠期・出産から育児期支援事業【シードリーフ】	4
1) 事業⑤ マタニティヨーガ&親子ヨーガ	
2) 事業⑥ サロン型ミニ講座	
3) 事業⑦ 妊婦講座	
4) 事業⑧ パパも育児のプロになる（パパプロ講座）家族のためのハッピー講座	
5) 事業⑨ 多胎育児支援（えんどう豆の会）	
6) 事業⑩ ベビーマッサージおこしやす広場（ぴかぴか）	
7) 事業⑪ 妊娠・出産・育児サポート事業（スマイルベビー）	
3 事業⑫ 多世代育児支援事業【いきいき孫育て講座】	6
4 事業⑬ 出張型性教育事業【いのちのふれ愛講座】	
II 事業⑭ 助産師再スタート事業【潜在助産師再就業促進事業】	7
III 指導、教育、研修会事業	8
1 事業⑮ 研修会・講習会	
2 事業⑯ 支援事業担当者養成のための講座【ミドワイフ道場】	
3 事業⑰ 学生指導・教育	
IV 事業⑱ 会議室等貸室事業	9
V その他の目的を果たす事業 運営管理	9
1 専門部会・支部活動	
2 事業運営・広報活動	
3 安全対策委員会立ち上げと活動	10
4 防災活動と取り組み	

おわりに

はじめに

社団法人京都府助産師会は、公益社団法人日本助産師会との連携のもと、人々のニーズに応える助産及び母子保健領域の活動の発展を目指すことを目的に、特にリプロダクティブ・ヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康・権利）の専門家として、安心・安全な妊娠・出産・子育てにつながる活動はもとより、思春期から更年期・老年期を含めた女性の一生のライフステージを通して幅広く対応することで、公益性の高い事業に取り組み、公益社団法人の認定・移行をめざし、公益法人としての枠組みや事業内容を整えた。平成24年6月京都府公益認定等委員会より答申を受け、平成25年4月の公益法人設立登記に向けた準備もできた。

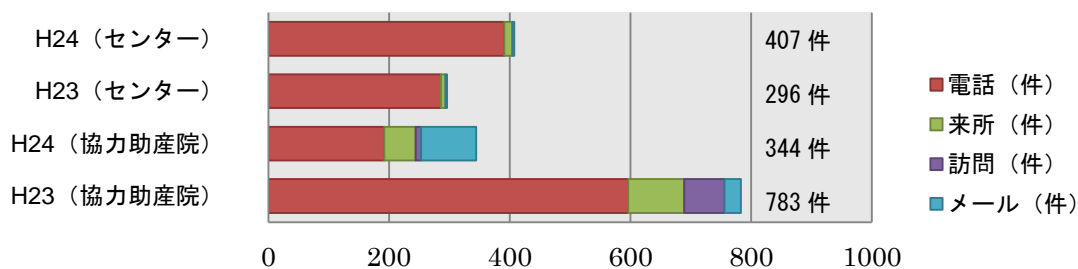
公益社団法人移行後も、子育て困難社会といわれる状況において、親となる前の児童・青少年期や祖父母世代へのリプロダクティブ・ヘルス・ライツの普及活動を通し、地域ぐるみの子育て支援を充実、発展させていく基盤となる事業活動を報告する。

I 女性・子育て健康支援事業（公益目的事業1）

1 相談事業

1) 事業① 無料電話・メール相談：月、火、木、金曜日 10時～15時 水曜日 9時～16時（会館）協力助産院3件で対応した。妊娠、出産、子育てのみならず、思春期、更年期、老年期など女性の一生を通して広く相談に対応でき、必要な情報提供や訪問などへ継続して支援ができた（図1）。

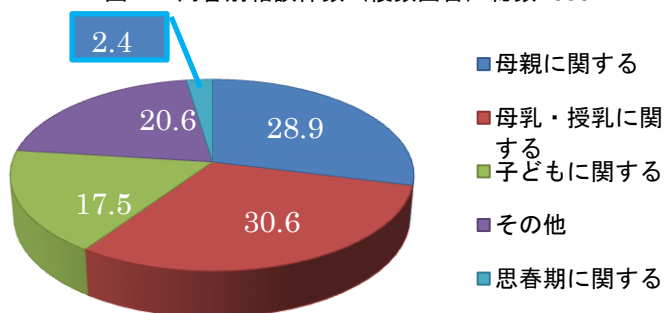
図1 子育て・女性健康相談件数



2) 事業② 個別面接相談：毎週水曜日 9時～16時（会館）及び協力助産院にて実施した。

相談時間拡大のため、支援センターにおける電話相談件数は、平成23年度の4割増の391件となり、来館相談13件とメール相談3件を含むと総数407件であった。内容の内訳としては、例年通り母乳・授乳や母親に関することで6割を占めた。（図2）協力助産院による相談件数は、府南部をサポートしている助産院以外は昨年に比べて減少傾向が見られたが、今なお会館で対応しきれない相談をサポートしてもらっている。「助産師に会えるMAP」や、訪問助産師紹介などにより、その後のフォローアップを各会員が行っていることも貢献している要因である。要支援者の他機関との連携事例は4件あり、継続支援中である。

図2 内容別相談件数（複数回答）総数=630

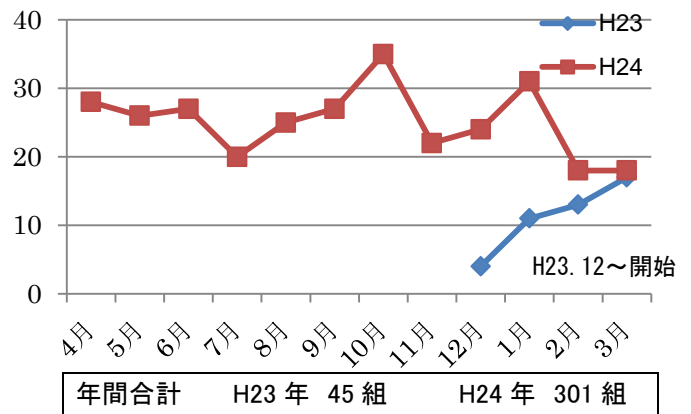


3) 事業③ 無料体重・身長測定（乳幼児）：毎週水曜 10時～12時（会館）

H23年12月から新規開催され、年間延べ301組の親子が利用し、安定した利用者数を確保している。季節や時期によって、参加者数は若干変動が見られる。（図3）

子どもを連れて母親1人で初めてのお出かけで利用後のリピーターも多く、助産師はあくまでも利用者同士をつなぐファシリテーター的役割を担い、情報交換・交流の場となるように、いずれ、会館以外の場所へ育児仲間と行動範囲を広げていくステップの役割となってきている。定期的に体重や身長を測定し助産師に会えることで、育児への安心感、自分に自信を持てる機会となっている。個別相談や継続支援が必要な場合は、来館個別相談やミニ講座などへつないでいる。発育・発達面から、医療機関や保健センターからの二次的な見守りやサポート的役割も担っている。

図3 H24年度無料体重測定 利用者延べ親子数（組）



4) 事業④ 不妊・不育等相談事業

(1) 「にんしんホッとナビ」ホームページ管理運営

平成24年11月より、京都市委託事業である「にんしんホッとナビ」ホームページが開設された。不妊・不育症等に関する悩みや思いがけない妊娠など、妊娠に関する相談メールを24時間受け付け、受付の自動返信の後、当会担当者が返信を行った。ホームページ開設から5ヶ月間で総対応件数は30件あり、ほぼ一両日中に返信できた。相談内容は不妊・不育症、妊娠判定についてであった。個別面接相談事業へつなぐこともできた。ホームページの訪問者は5ヶ月間で延べ838件あり、80%が新規の訪問者であった。認知度が上昇すれば、気軽な相談窓口として一人で悩むことなく、相談内容に適した他の事業や緊急を要するケースへの対応も適切につなぐことが可能である。

(2) 個別面接相談：第1・3木曜日①14:00～ ②15:00～（会館）

不妊などに対する正しい知識、情報の提供をおこない、プライバシーに配慮して個々の心と身体の悩みや相談に対応した。開催回数：20回 面接人数：20名

(3) 交流会：年4回、3ヶ月毎の6・9・12・3月の第3木曜日14:00～

不妊などに関する悩みを持つ人を対象に、知識の普及を行うとともに、参加者同士が悩みを自由に話し合いコミュニケーションを深める場とした。開催回数：4回 参加人数：10名、見学者2名

(4) 不妊等相談事業に従事する者に対する研修会：年1回開催

関係者研修 テーマ「男性不妊」講師：市岡健太郎医師（いちおか泌尿器科クリニック院長）
保健師8名 助産師会会員9名 潜在助産師1名 計18名の参加があった。

(5) 不妊・不育等に関する普及啓発研修会：年1回開催

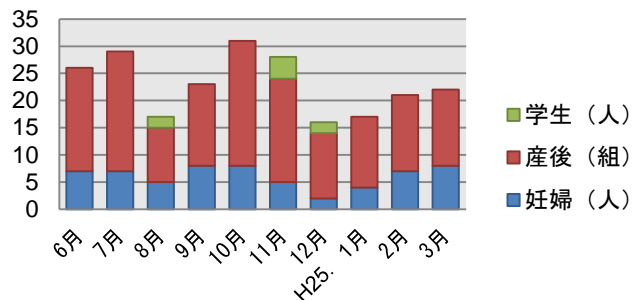
市民公開講座 テーマ「内視鏡で見るお腹のなか」
講師 矢野 樹理 医師（足立病院 産婦人科医師）
井上 卓也 医師（足立病院 産婦人科医師）
一般参加者16名 医療従事者15名 計31名の参加があった。

2 妊娠・出産から育児期支援事業【シードリーフ】

1) 事業⑤ マタニティ・ヨガ&親子ヨガ：毎週月曜日 10時～11時30分（会館）

この事業は、個人事業から平成24年6月より助産師会の公益事業に加わり、毎週月曜日に月4回開催した。地域での呼びかけや当会のホームページをきっかけに親子連れで、時には友達同士での参加者が多い中、妊産婦さんの参加が増えた。延べ参加総数は妊婦61人、親子161組、学生6人であった。（図4）対象者によりマタニティ・ヨガと産後ヨガをコンビネーションさせたシードリーフ特有オリジナル版は、自分自身の体に向き合い、心身ともに健康を維持・増進できるようなエクササイズとリラックスと呼吸法を身につけられるプログラムである。妊婦さんは親子連れの姿を見て、出産から育児へのイメージを膨らませ、産後の方は当時をプレビューしながら参加しているのを参加者の交流の様子から感じ取れた。ヨガ終了後は妊娠から出産、子育て等の相談を受けた。今後も助産師ならではの女性とその家族のライフステージ全般へのアプローチとサポートができる教室を目指したい。

図4 H24年度マタニティ&親子ヨガ参加者数



2) 事業⑥ サロン型ミニ講座：ふれままサロン（妊娠、出産、育児など）：第1，3水曜 ほっこりサロン（赤ちゃんの食事－母乳，離乳食，卒乳など）：第2，4水曜（会館） 今期2期目の開催であり48回開催した。開催回数が月2回から4回に増えたことが認知されるのに時間を要し、従来の第1，4水曜日の関心の高い「離乳食」「卒乳」など母乳育児関連の内容に参加者が集中した。昨年度に比較し「出産」関連の妊婦の参加が少なかったため、次年度からは、赤ちゃんの育児グッズや出産関連品を手作業しながら情報交換を行う「ちくちくサロン」を新規開催予定である。

表1 平成24年ミニ講座（ふれままサロン、ほっこりサロン）参加者数

サロン	H24年				H23年		
	妊婦 (人)	産後 (組)	祖母	計	妊婦 (人)	産後 (組)	計
ふれまま	5	10	1	16	16	24	40
ほっこり	0	17	0	17	1	8	9
合計	5	27	1	33	17	32	49

3) 事業⑦ 妊夫講座（沐浴実習+妊婦体験+ミニ交流会）

平成24年度より新規開講。男性（パートナー）が、妊娠中から積極的に妊娠・出産・育児に関わる機会を作り、女性をサポートすることができるような出産準備教室である。行政では対応しきれていない土日祝日に、参加可能な妊夫カップルを対象としている。今年度は、10月27日（土）12月16日（日）1月20日（日）の計3回実施した。（表2参照）

妊夫カップル6組，産後先輩親子5組，祖母や学生を含む合計28人が参加した。男性（パートナー）同士，妊婦同士，先輩パパママとの情報交換できる交流の場となり，参加者の女性の多くは支援事業への継続参加にもつながった。特に1月20日は、午前中のパパプロ講座に引き続き，午後から開催したため，男性パートナーがさらに産後の自分をイメージできる機会となったので，来年度のパパプロ講座

H24 年度事業報告

への参加が期待できるだろう。

行政区での沐浴体験事業が減少する中、来年度は開催回数増加とさらに宣伝・広告活動を活発にし、助産師会館での参加者増加を目指す。企業との共同開催も早急に検討する予定である。

表 2 H24 年度 妊婦講座参加者

場所	開催数 (回)	出産前			出産後			学生	合計
		妊婦	妊婦	祖母	産婦	産婦	子		
会館	3	6	6	1	3	5	5	2	28

4) 事業⑧ パパも育児のプロになる (パパプロ講座) 家族のためのハッピー講座

今年度は新規支援事業開始2年目であり、事業計画通り年2回、平成25年1月20日と3月3日(日)に開催した。第1回の内容は昨年同様(親子ヨガ、コミュニケーション講座、つぼマッサージ、ワンポイントレッスン)で募集し、新規の参加者10組、子どもの年齢は概ね3ヶ月~1才半頃までと、この事業の目的の一つである「パパとの初めてののお出かけ」となる乳幼児に対象が絞られてきている。第2回は、男性保育士協力により内容をスキルアップしリピーターを確保できた。男性ならではの悩みなどサポートの視点が拡大される効果が得られた。ランチタイムは、昼食をとりながらの交流会の良さが浸透してきている。病気によるキャンセルは1組だけだった。初節句の日曜日ということで、女兒の参加が10人中3人と大幅に減り、年度末の繁忙期のため参加を断念する者も多かった。来年度は日時の設定を十分に配慮して、さらなる参加者増加を見込む予定である。

表 3 H24 年度パパプロ講座参加者数

場所	開催数	パパ	乳幼児	ママ	学生	合計(人)
会館	2回	18	20	16	3	57

5) 事業⑨ 多胎育児支援 (えんどう豆の会)

(1) 「お出かけ」をテーマにツインズ通信1200部を年3回発行した。8月号「お出かけ先いろいろ」11月号「予防接種を受ける」3月号「お出かけサポートのいろいろ」を特集した。

(2) えんどう豆ちゃんたちのファミリー教室を会館で4コース(7月10月1月4月)開催した。園部地区1コースを計画したが中止となった。参加者は妊婦16名、家族18名、先輩家族27名で合計延べ61名。見学者助産師1名、他1家族4名であった。

(3) 家庭訪問は1件実施した。

(4) 『平成24年度京都府虐待予防助成金』を受け、電話とメールによる相談事業を実施した。電話相談17件、メール相談114件応答した。これにより教室受講家族に対する継続相談が実施でき、保健センターや病院助産師等と連携できた。広報により府北部と南丹地域での事業認知が広がった。

(5) 6月24日日本多胎支援協会の研修会に参加、2月7日は多胎ミニ講座と交流会を開催し、22名が参加して他団体との交流がすすんだ。

(6) ツインズ通信読者対象(280名)にアンケート調査を実施し回収中。

(7) 保健センターや病院医院、多胎サークルや集まり等との連携が評価され「子どもを共に育む京都市民憲章平成24年度実践者表彰」を受けた。今後も他団体と連携した支援活動が重要である。

6) 事業⑩ ベビーマッサージおこしやす広場「ぴかぴか」

ベビーマッサージを通して、出産後初めて赤ちゃん連れで安心して出かけられる場所として、助産師会館では年間36回開催し、延べ76組の親子が利用できた。出張による広場は4か所の依頼があり、延べ48組の利用があった。児童館等への出張は、参加者の確保がなされており、ベビーマッサージを通して参加者間の交流や育児相談を行うことができ、育児不安の軽減には効果的であった。妊娠中から助産師会の事業（マタニティヨーガ、ふれまま講座など）に参加していた妊婦は、出産後の事業に継続して参加される可能性が高かった。充実した学生実習のためにも、開催一回あたりの参加人数を増やすことが必要である。今後もホームページへの活動掲載など地道な広報活動や、知り合い同士で参加しやすい環境作りを整えたい。

表4 H24年度 ぴかぴか利用者数

場 所		開催回数	利用者数(組)
会館	助産師会館	36	76
	聚楽保育所と合同	1	14
合 計		37	90
出張	松ヶ崎児童館	1	6
	朱雀第3児童館	1	15
	長岡京市民活動センター	1	13
合 計		3	34
総合計		40	124

7) 事業⑪ 妊娠・出産・育児サポート事業（スマイルベビー）

開催して4年目となる24年度は、高浜町地域の母子に事業の存在が浸透し、毎回20～30組の妊産婦が参加するようになった。（高浜町年間100人の出生数）年間の参加者延べ人数は、妊婦52人、産婦264人で、23年度の妊婦48名、産婦243名よりも増加している。妊婦の増加は、関心のあるテーマがあるときに参加者が増加している。今回は食育の調理実習もテーマに加えた。

産婦の参加は平均してあり。初参加者の参加動機は交流や友達作りと育児相談が多く、参加者同士交流しながら育児などのアドバイスが得られることがスマイルベビーの魅力であることがうかがえた。25年度は、さらに居心地の良い空間をつくるために配置変えを計画。また、子育てワンポイントアドバイスのテーマにニーズのあった内容を追加する。

3 事業⑫ 多世代育児支援事業【いきいき孫育て講座】

講座開催の実績は以下の表5のとおりである。受講予約が一人で結果的に個人相談となっても、開催希望があったことや、受講者の質問、グループワークでの話の内容などから、受講者のニーズは個別性が高く幅広いものであった。そのため、今後は講座以外に小人数のカフェ形式であれば、個別性の高いニーズに対応できる感触を得た。

表5 H24年度 孫育て講座受講者数

当会主催	講座数	受講者数 (延)	備 考
京都府助産師会館	5	18	京都府地域力再生交付金事業
文化パルク城陽	水害中止		
舞鶴文化会館	2	14	〃
福知山くくう助産院	2	16	〃
出張依頼・共催			
高島屋 洛西店	2	21	(公社)日本助産師会事業
高島屋 四条店	2	37	〃
(公財)男女共同参画推進協会	1	7	

新しい試みとして（公財）京都市男女共同参画推進協会が企画された男性対象の孫育てシリーズ講座の一枠を担当し大変好評であった。百貨店の出張孫講座依頼は参加者が多く、受講者の獲得の意味から独自の情報網を持っている団体の依頼を共催で次年度は積極的に取り入れていきたい。

4 事業⑬ 出張型性教育事業【いのちのふれ愛講座】

平成24年度は中学校3校 高校7校 児童館3か所 保育所1か所で出張講座を行った。親子いのちのふれ愛講座は7月1日(会館)で開催した。親子5組の参加と助産師学生2名の見学があった。この講座は読売新聞社の取材を受け後日掲載された。メンバーミーティングを7回開催し、その中でテーマ別に講座内容について話し合い、派遣講座の内容を共有し、新しい情報や知見を取り入れて、講座内容のブラッシュアップをはかった。事業⑭「にんしんホットナビ」の立ち上げ準備、メール相談の運営に携わった。

図5 命のふれ愛講座「出張性教育活動実施数」(H24.1~H24.12末)

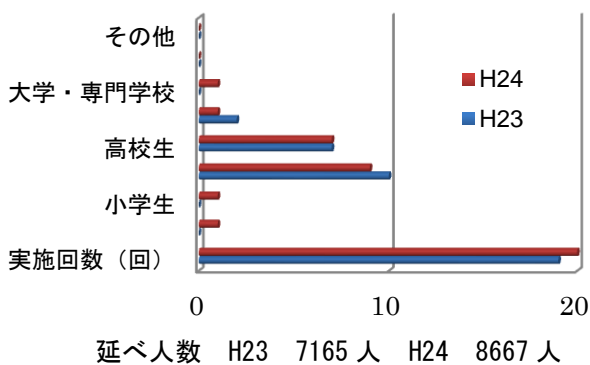
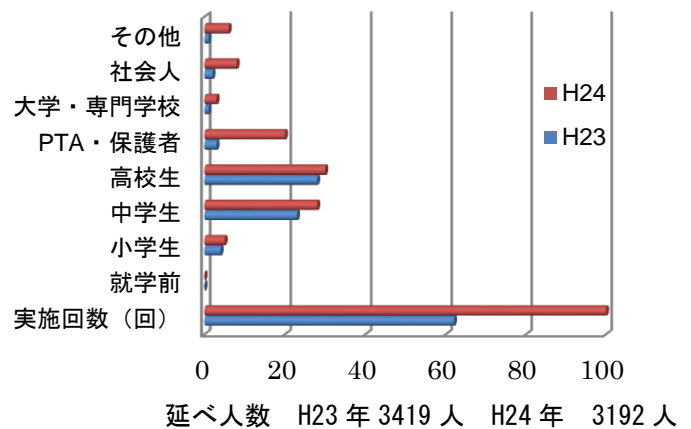


図6 命のふれ愛講座 個人実施回数(H24.1~H24.12末)



II 事業⑭ 助産師再スタート事業【潜在助産師再就業促進事業】

1 研修会について (実施内容は後述Ⅲを参照)

今年度の研修会では、研修内容をいかに魅力的な内容にしていくかを指し実施した。助産師としてのスキルアップを目指す上で、今の社会情勢の中で必要な知識や時代のながれ等、まさに旬の話題は何かを検討し研修内容の企画にあたった。再就職に向けての不安軽減につながる研修内容が特に重要と考えられる。また、学生への参加を促す試みの拡大を始めた。潜在助産師への介入だけでなく、いかに仕事を継続していけるよう、学生時代からのモチベーションを高めることが、将来の離職防止につながるため、引き続き継続的な働きかけを実施していくことが望まれる。

2 医療機関、助産所、助産師会等における実務研修

*実務実習を受けた実人数(延べ人数) 総計 実47名(延べ54名)

①助産所での実務研修 (助産院) 実3名 妊婦健診, 講座, 分娩産褥入院件見学等(出張開業助産師) 実1名(延べ4) 妊婦健診訪問の実際等

②助産師会が主催あるいは後援する事業についての研修

赤ちゃんサロン実2名, 多胎育児支援事業「えんどう豆ちゃんたちのファミリー教室」実1名, マタニティヨガ実1名, パパプロ講座実6名 妊婦講座実1名 ミッドワイフ道場 実17名 やんちゃフェスタ 実1名, いきいき孫育て講座(福知山) 実6名が参加した。

助産師の活動を身近に接することで、助産師の状況に応じた役割を知るとともに、妊婦の立場に立った細やかな支援方法を学ぶことができた。また、担当助産師と意見交換がゆっくり行えることで、仕事復帰にむけて抱えている不安の解消、問題解決の糸口を見つけることができた。

H24 年度事業報告

3 就業電話相談・就業への支援

助産師再スタート相談（電話・メール・面接による相談）を月～金曜日の10:00～15:00（6月1日～3月末まで）おこなった。相談件数は実人数41名であった。

4 実務研修・就業相談後の状況

希望どおり就職した8名は以下のとおりであった。

＊開業 助産所開業（乳房ケア）1名 助産所開業（小児科と協同）1名

＊病院パート勤務3名 ＊家庭訪問事業2名 ＊京都府助産師会 助産師会理事1名

当会としては様々な支援事業を京都府全体で展開するなど、広範囲で潜在助産師への働きかけを継続した。今後も京都府全体を考えた事業展開を継続し、各地域での助産師活動の活性化をはかることで、潜在助産師の再就職促進につなげたい。

Ⅲ 指導，教育，研修会事業

1 事業⑮ 定期研修会の開催

【第1回研修会】

日時：平成24年7月21日（土）13:00～16:30

会場：京都府立医科大学医学部看護学科学舎 1階視聴覚室

講演：新生児・乳幼児へのケアのスキルアップ

講師：東出 崇 先生（はぐはぐキッズクリニック院長 小児科医）

参加者：助産師34（会員17・非会員5），保健師9，看護師6，学生3

日本助産師会継続教育ポイント1点取得

新生児・乳幼児の診査方法，予防接種，SGA性低身長，最近のトピックスなど盛りたくさんの内容で，勤務助産師，開業助産師，保健指導，訪問活動などを実施している助産師には大変勉強になった研修会であった。最近の動向という点において助産師にも必要とされる内容であった。

【第2回研修会】

日時：平成24年8月25日（土）13:00～15:00

会場：綾部市保健福祉センター 2階和室

講演：京都府北部の周産期医療の現状と助産師に期待するもの

講師：野口敏史医師（京都府立与謝の海病院 副院長、京都府立医科大学准教授）

参加者：会員18名，非会員5名，助産師学生4名

京都府北部の厳しい周産期医療の現状と課題をお話いただき，京都府で活動する周産期医療に携わる者として，どのように自分たちが役割をはたしていけるのか，共に分かち合い考える機会となった。

【第3回研修会】

日時：平成24年12月8日（土）13:30～16:00

会場：京都アスニー 第3研修室

講演：京都府の小児科医療の現状 ～子育てしやすい環境を目指して～

講師：京都府医師会 森 洋一 会長

参加者：会員・18名，潜在助産師2名，医療関係者4名，学生25名

周産期医療の現状や産科・小児科及び助産師との連携について等，政治的な意見も交えご講演頂いた。助産師にとって小児とのかかわりは重要であり，大変勉強になった講演であった。

【その他】

H24 年度事業報告

平成25年度10月開催予定の日本助産師会 近畿地区研修会運営担当として、企画・講師交渉などの準備を進め、平成25年5月の案内発送までの作業を完了した。25年度も開催に向けて研修会運営作業を継続する。

2 事業⑯ 支援事業担当者養成のための講座【ミドワイフ道場】:(会館)8月以外の毎月1回開催、毎回違うテーマで参加型の少人数の講座を開催した。(別紙1参照)

3 事業⑰ 学生指導・教育

1) 学生実習については、表6のとおり、昨年度より1校少ない2校(看護学専攻1, 社会福祉学部1)の受け入れを実施し、実人数計76名(うち男子9名)を指導した。表7のとおり、事業別の見学実習は計34回、内訳は無料体重・身長測定、ベビーマッサージ、ミニ講座の順に多かった。その他実習以外での研修会や事業への自発的な参加及び見学は、各事業報告を参照のこと。

学生への研究協力は、理事会承認を得た以下の1件であった。大学内での4回生看護研究発表会にて口演されている。3回生時の見学実習が研究動機となった一例である。

来年度は、すでに新規2校の実習依頼と、数件の研究協力問い合わせを受けている。さらなる助産師会での学生教育・指導の機会が広がるであろう。それと同時に、受け入れ側である当会の助産師は、指導者としての資質の維持、向上を求められている。

表6 学生実習学校別内訳

実習期間	大学名	学部学科	実習人数(男子)	内容
H24年10月1日 ~12月7日	京都大学	医学部人間健康科学科 看護学専攻3回生	66名(6名)病欠のため1名欠席	母性看護学実習
H24年10月24日	佛教大学	社会福祉学部2回生	10名(3名)	子育て支援、会館での取組 etc

表7 事業別見学実習担当回数及び参加延べ人数

	事業名	回数(回)	参加延べ人数(男子)
月曜	マタニティ&親子ヨガ	4	10(0)
水曜	無料体重・身長測定	11	45(5)
	ミニ講座	8	25(2)
木曜	ミドワイフ道場	1	2(0)
	すずらん相談	1	2(0)
金曜	ベビーマッサージ	9	29(4)
	合計	34	113(11)

2) 学生研究への協力

1. 『分娩場所として自宅が選択される理由-第1子を自宅分娩した母親の語りから自宅分娩における援助のあり方を考察する-』

京都大学医学部人間健康科学科
看護学専攻4回生 村山沙希

IV 事業⑱ 会議室等貸室事業

主として、当会会員の子育て・女性健康支援を目的とする個人活動の事業(エクササイズ、リラクゼーションクラス、親業コミュニケーション講座、母乳育児基礎セミナー、助産師サロンなど)に対して、会館の1階ホール、2階会議室を年32回貸貸し、事業を展開してもらうことで、広く社会の子育てと女性の健康に貢献した。さらなる有効活用を目指したい。

V その他の目的を果たす事業 運営管理について

1 組織の強化

1) 新入会者の獲得 平成24年度末で会員数249名となった。新入会者は17名で、主に施設勤務助産師であった。非会員の研修会・交流会への参加呼びかけや賠償責任保険の加入が契機となった。

2) 技能上達のための小研修を含めた専門部会、支部交流会の活動

《専門部会活動》

(1) 助産所部会：助産所（自宅分娩含む）における安全・安心・安楽な出産ができる環境を整えることを目標に、安全対策委員とともに安全対策を徹底した。（2か月に1回定例会において事例検討会、ヒヤリハット報告を実施、周産期医療連絡協議会への出席を打診、来年度の連絡協議会参加依頼、新設助産所の立ち上げ支援、助産所業務ガイドライン改訂にむけてのパブリックコメント提出など）地域で活動する助産師のPRとして、ミドワイフ道場の講師（2講座）、京都市プレママ訪問事業の研修会で講師を務めた。

前述の潜在助産師再就職促進事業講演会を教育委員と共に企画・実施し、部会の活動報告で助産所部会の地域での活動をピールールできた。また各施設での教室、府・市及び各種団体の研修会、学校教育（看護学校、助産学科授業や臨床実習、性教育など）子育て支援事業へ講師などとして参加し協力した。

(2) 保健指導部会：7月21日「新生児・乳幼児ケアのスキルアップ研修」を教育委員会と共催し、65名参加の内、助産師の参加は38名であった。保健師、看護師の参加も多く関心の強さを感じた。日本助産師会の通常総会、10月近畿地区研修会における部会集会に参加した。12月母子訪問指導者研修会基礎編と部会集会に多くの方が参加し、今後の訪問活動に役立つ内容であった。2月7日多胎ミニ講座を共催し、当事者や支援者と共に学び合った。2月23日部会集会開催、伝達事項と医療安全管理、ヒヤリハット事例検討、交流会を行い、現状と今後の課題を話し合った。部会集会は参加しやすい日時を検討が必要である。部会員の研修参加は各自の責任である。今後も研修会への参加を促していく。訪問事業等調査を行い医療安全対策の強化に努めるとともに、部会員の連携を図れるようリスト作成など考えていきたい。

(3) 勤務部会 勤務助産師の資質向上のための研修会として、9月30日京都府予防接種講演会「子どもを守るためのワクチンスケジュール～ワクチンデビューは生後2ヶ月の誕生日～」を中支部との共同企画で開催した。参加者は38名、うち保健師6名、京都府助産師会会員21名、その他小児科クリニック6名、病院職員5名であった。乳児に関わる複数の職種の方々のニーズに即した内容であったことが伺える。

研修を契機の入会者はなかったが、少なくとも顔合わせ、交流の一助とはなったものと思われる。こうした助産師の資質向上のための研修の充実をアピールして勤務部会では次年度入会者を3名確保した。活動計画では、中支部と合同での「虐待」の研修会や日本助産師会との合同学習会を計画していたが、実施には至らなかった。

《支部会活動》

(1) 北支部 6月23日京都市東山区のやすらぎの家（国土交通省のモデル事業として建設されたグループヒーリングという健康な高齢者向けの共同住宅）を見学した。（参加5名）高齢者以外への利用も検討されており、産褥入院の施設としても利用可能と思われ、今後の支援事業を展開できる可能性がある情報を得た。

(1) 東支部 平成24年12月3日 桶谷助産院にて支部交流会を開催した。（6名参加）助産院施設の見学後、昼食を摂りながら会員間の交流をはかった。小林助産師から永年の経験談等を伺い、産婆魂を感じる有意義な時間を過ごした。

(2) 中支部 計画した「虐待」テーマの研修会はできなかったが、「予防接種」についての研修会を勤務部会とともにおこなった。2月18日の災害時安否確認電話連絡訓練にて、会員と電話による会話ができ、会員との距離が縮まったと考える。

H24 年度事業報告

施設に勤務する助産師が多い当支部では、会員確保のために、勤務する助産師にとっても人間関係の広がりができる魅力と知識向上にも役立つ組織であることを、今後も口コミや事業展開による広報活動で、会員獲得に努めていきたい。

(3) 西支部 9月30日と1月27日に支部会を開催し、それぞれ8名、6名の参加者があった。リフレッシュヨガ、リンパドレナージの体験をしたり、先輩助産師の貴重な体験談や提言などを聞く機会もあり、参加者同士の情報交換や交流を図ることができた。今年度は研修会を計画せずに支部会員の交流に重点を置いたが、結局参加人数が限られており、今後はより多くの会員が集まれるように、企画や広報の工夫をしていく必要がある。また、支部連絡網をEメール中心にしていく作業を少しずつは進めてきたが、まだ十分ではなく、今後ブロック制や施設単位の連絡係りの設定などして、緊急時にも有効な連絡網を整備していきたい。

(4) 南支部 平成25年1月26日に支部交流会と研修会（保科真二先生によるSTD講座）を企画したが、講師の都合により研修会が中止になり、交流会のみの開催になった。研修会は25年度中に再度同じ内容で企画する予定である。24年度に目標として掲げていた支部のメーリングリストの立ち上げについては、平成25年2月より34名の登録により運用を開始した。支部会員の交流と情報交換の場として、積極的な活用を促していく。新規会員獲得については、勧誘は行っているものの退会希望者もあり、会員増にはつながっていない。公益法人として新たにスタートした当会への入会を、特に勤務助産師に勧めていきたい。

(5) 丹後支部 交流会、ミッドワイフ道場の北部開催、孫育て講座の北部開催をきっかけに、情報交換の機会が増えた。また、防災訓練をきっかけにメールアドレスの把握ができる会員が増え、メーリングリスト登録者が増えた。今年度の新入会者はなかったが、次年度入会予定者は獲得できた。

2 健全な事業運営と効果的な広報活動

1) 出張形態の事業（性教育、孫育て、ベビーマッサージなど）を前述の通り府域で開催した。

2) 公益社団法人移行のため、ホームページの更新準備をおこなった。事業目的に合った対象への事業案内等、効果的な宣伝活動をおこなうことができた。

3) 非会員助産師の研修会等への参加を促し、前述の通り各種研修会に無料で参加してもらうことができ、当会の活動をアピールできた。

4) 事業に対応できる人材を育成するため、月1回ミッドワイフ道場や助産所、各事業の見学をPRした。参加者は事業⑭のとおり。

5) 経費削減案の短期・中期目標と計画案を理事会・運営委員会等で設定し、次年度の事業計画に盛り込んだ。実施可能な節電・消耗品管理等の経費節減対策は、直ちに実施した。

3 助産師業務の事故防止・安全対策の充実 安全対策委員会の立ち上げ

1) 分娩件数、転院搬送件数を例年どおり（公社）日本助産師会に報告した。また、部会定例会において、転院搬送された症例について検討する機会をもった。また、全国的な分娩基本情報データ収集システム開始にともなうオンラインシステムの設定対応を行った。

2) 宇治徳洲会病院小児科の田中慎一郎医師を講師にお招きし、NCPRの研修会を助産所部会主催で2回開催した。第一回9月27日あゆみ助産院において、参加者10名。第二回2月15日 助産師会館において、参加者7名で、助産所部会のみならず他部会からも参加した。

3) 2月16日は、大阪府助産師会館で開催された都道府県助産師会安全対策委員連携集会に出席した。

4) 安全対策委員と理事（助産所・勤務・保健指導部会員）が、分娩を取り扱う助産院（出張開業

H24 年度事業報告

含む) 全11ヶ所を対象に、助産所安全管理評価の監査を行った。すべてが助産所業務ガイドラインを順守し、安全に配慮して助産業務を行っていることを確認した。監査結果は(公社)日本助産師会宛てに報告した。

5) 公益社団法人移行に向け、事故防止・安全対策の取り組みを充実させるために、安全対策委員会を常設委員会と位置付けた。

4 防災活動への取り組み

1) 防災MAPを完成させ、(公社)日本助産師会近畿地区防災会議に提出した。防災担当委員の変更などに伴い、随時最新の内容に修正していくこととした。

2) 防災担当は副支部長であることを周知徹底して近畿地区防災会議に中副支部長も出席、京都府防災訓練に西副支部長も参加した。関連機関と会員間の連携役となることを再認識した。

3) 9月に行われた京都府防災訓練に2名参加し、府の防災会議に4回出席した。

4) 京都府とは防災会議・訓練参加による連携ができた。京都市とは平成25年度に会館が福祉避難所登録予定であり、今後も連携をとっていく。近隣府県助産師会とは年3回の会議を通し、顔の見える関係を築き、連携を深めることができている。

5) (公社)日本助産師会のアンケート調査により、災害地(東日本大震災)における助産師の活動状況を把握しまとめた。今後の防災活動の参考になる記録となり、会員に周知することにより有効に活用できる記録となった。(別紙2参照)

6) 京都府防災マニュアルの周知徹底は今後の課題である。

おわりに

平成24年度は、助産師の職能団体として、公益事業を展開するための基礎作りと、事業活動を実施しながらその内容の充実を図るためのヒントを得た。特に行政や関連団体と協働・連携した事業に取り組むこと、そのためにも組織強化をはかり、当会の活動が多くの人に周知される活動が今後さらに必要である。

H24年度 ミドワイフ道場参加人数

北部開催：年5回火曜日 13時半～15時（講師により会場、日程及び時間変更あり）

潜在（ ）

月日	テーマ	会場	講師	会員	非会員	学生
5/15	舞鶴市における女性相談員の取り組みについて	舞鶴市中総合会館 5階	西村佳子（丹後）	6	2	0
7/10	新生児訪問について	福知山保健センター	味谷ゆかり（西）	10	6	0
8/25（土） ※	（教育委員会合同研修会） 京都府北部の周産期医療の現状と助産師に期待するもの	綾部市保健センター	野口敏史医師 与謝の海病院副院長、京都府立医科大学准教授	18	5	4
H25 1/7（月）	ベビーマッサージ～サロン運営における助産師の役割について～	福知山観音寺 くくう助産院	片岡隆子（丹後）	8	2	0
3/12	食育について	舞鶴市中総合会館 5階	藺田宏子先生 元小学校教諭、陽だまり工房主宰	6	3	0
				48	18	4

京都府助産師会館開催：毎月第2木曜日 13時～14時半（講師により、若干の日程及び時間変更あり） 潜在（ ）

月日	テーマ	講師	会員	非会員	学生
4/12	鍼灸師のプロから学ぶ～助産師に役立つ、つぼマッサージ～	番家モモ代（南）	9	0	0
5/10	流産、死産から考える～助産師の役割～	中島奈美（北）	8	0	0
6/14	幸せ子育て親育ち～子宮の中からの子育て支援～	岡本美由貴（西）			
7/19※ 1	（性教育グループ共催） ゆっくり素敵に大人になろう ～亀岡以北での性教育講演の活動より～	木村和子（西）	13	2	1
9/13	助産師として出生前診断に関わるには ～遺伝カウンセラーの立場から考える～	三島祐子（南）	10	0	0
10/11	子育て中の助産師が外で働く不安やジレンマを克服する方法 ～うまく家族の協力を得るコツを通して～	三浦安津美（南）	8 (1)	0	0
11/15 ※2	勤務助産師が抱えるジレンマ ～施設の中でどうやって女性に寄り添えるか？～	秋葉秀美（中）	8 (1)	1 (1)	2
12/13	家庭訪問に自信をつけよう ～助産師だからこそできる訪問の醍醐味～	藤原朋子（南）	6 (1)	2	0
1/24	フリースタイル出産～女性が自分らしく産むためには～	日笠マユミ（東）	13(2)	1	2
2/14	ローリスクからハイリスクまでの妊産褥婦へのかかわり方 ～助産師外来での実践を通して～	神原祐美（北）	10 (2)	5 (2)	2
3/14	助産師として開業を考えている方のために ～（株）bebecarty アクエリエル京都設立を通して～	カーティー菅田倫子 （北）	14 (1)	1 (1)	0
合計			99 (8)	12 (4)	7

＜京都府助産師会における東日本大震災支援活動報告＞

1) 京都府助産師会理事会で決定した活動

①電話相談

・H23年3/16～4/2

毎日9時～17時、京都府助産師会館にて午前・午後の電話当番。

・H23年4/2～5/15

理事が当番制で災害専用の携帯電話を持って電話をうける。

会員が各自で受けた相談も併せ、電話相談件数 合計 28 件

②避難してきた人を受け入れる有床助産院への災害活動支援金を集める。

・4/18～5月末まで振込み・募金箱で集金。会員へメール便・ホームページにて支援金募金呼びかけた。約10万円集まる。

③京都府と京都市に、京都府助産師会館1F研修室を、一時避難所として登録を打診した。⇒この時は行政業務繁雑を極めており断られたが、その後、H25年度の京都市との福祉避難所締結（予定）へと結びついた。

④会員の家族より、物資調達申入れあり、日助メーリングリストに送信。

⑤会員に、避難所で作成された毛糸で編んだオッパイの広報・購入・募金のお知らせ等を行った。

⑥H24年10/10、京都府庁の企画で、京都府内へ避難されている430世帯に対し、京都府助産師会の挨拶文と案内ビラを封入・配送準備作業ボランティア参加。

2) 助産所活動

①東支部桶谷助産院：神奈川県川崎市の妊婦さんが東京の助産院より転院。過期産陣痛発せず、病院出産の報告。

3) 個人的活動

①中支部：丹所紀代子さん H24年3月1日～3月31日、厚労省の健康サポート事業に関わり仮設住宅十ヵ所に分散して住む215名の健康診断と104名の健康聞き取り調査をした。その他カンパ活動や講演会に参加。

②北支部：後藤幸恵さん H23年4月末～9月末 放射能の影響を心配されている茨城県の妊婦とその子ども（3歳・1歳）を自宅で預かった。8月に分娩され、1ヶ月後に帰宅された。

4) 日助よりのボランティア派遣

柴田洋美さん 震災直後から、何度か現地に赴き継続して活動されている。

以上について、日本助産師会へ報告（H24年2月28日）

担当：小河原恵子、夏山洋子